科学研究費助成事業 研究成果報告書



平成 26 年 5 月 2 9 日現在

機関番号: 32670 研究種目: 基盤研究(C) 研究期間: 2011~2013

課題番号: 23520247

研究課題名(和文)四国地域における俳諧資料の総合的調査と研究

研究課題名(英文) Research and comprehensive study of haiku material in Shikoku region

研究代表者

福田 安典 (FUKUDA, YASUNORI)

日本女子大学・文学部・教授

研究者番号:40243141

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 1,500,000円、(間接経費) 450,000円

研究成果の概要(和文):四国地域では特に愛媛に多くの俳書が残されている。これらについては、かつては地元の研究者が翻刻や紹介、保存状況に務めてきたが、近年は保存について危機的状況にあると言わざるを得ない。その現状に対して、科研で行うことができた成果は、研究発表とシンポジウム開催である。 研究論文は、『平賀源内の研究 大坂篇』を刊行し、伊予松山の俳人、栗田樗堂について煎茶や上方文人との関係を整理した。 シンポジウムは、松木淡々や山中時風を軸に、開催した。ついで、樗堂についての鼎談を実施した。また、フィリピン大学の国際会議で高浜虚子を中心とした「松山の能楽」について報告した。

研究成果の概要(英文): most of Haisyo are left in Ehime especially in the SIkoku region.For these,local r esearchers have been served suggestions or repubulication, to save the situation in the past, but have to sa y that there is a critical situation for storage in recent years. Outcome could be for the current state, is carried out in scientic research is the symposium and papers, books.

So I reported Hiraga Gennnai and Kurita Tyodo. And reportede about Matyuyama NOh in Philippin University.

研究分野: 日本文学

科研費の分科・細目: 基盤研究(c)

キーワード: 俳諧 四国 栗田樗堂 松木淡々 山中時風 平賀源内 煎茶 フィリピン

1.研究開始当初の背景

地方に眠る俳書については、その保存や活用については危機にさらされている。かつては、それなりのどの地方にも郷土史家が行われて、地方の俳書の紹介、翻刻が行われてきた。ところが、その悲惨な状況さえもでありまるといっているを増しているというがあるが、例えば土居の時間にしているのではあるが、例えば土居の時間にしているのではあるが、例えば土居の時間にしているのではあるが少ない。これは比較的、注目されている松山においても同様で、何らかの措置が必要であると思われる。

その措置の一つには、研究の推進と活況があげられる。

同時に、シンポジウムや講演などを通じて 一般社会にアピールする必要があろう。

加えて、平賀源内研究には四国の俳諧との視座が必要である。

2.研究の目的

俳諧に限ったことではないが、原資料を扱い、保存と顕彰に努める研究が減少しつつある。それにはいくつもの要因があり詳述は避けるが、とにかく俳諧について一度その問題意識からなされる科研補助事業があってもよいと考えられる。

申請者は長く愛媛に勤務し、豊富な俳諧資料が所蔵されながら、その保存をめぐる環境の劣悪なケースを実感してきた。そこで四国を中心として、従来の俳書にまつわる研究や現状の調査を中心とし、最終的にはシンポジウムと論文や報告書をもって世に知らしめたい。

また、あわせて平賀源内の四国時代、讃岐 談林の実態についての調査を通じて、彼の知 られざる伝記を明らかにすることを目的と している。

3.研究の方法

まず、基本的に原資料を調査する。四国の 俳書が現存するおもな機関は以下である。

松山市立子規記念博物館 愛媛大学 河野信一記念館 四国中央市教育委員会 愛媛県立図書館 蒲田共済会 香川大学 大洲市立図書館 四国大学

それ以外にも、個人蔵のものも多く、星加宗 一『伊予の俳諧』(昭和50年7月 愛媛文 化双書23 愛媛文化双書刊行会編)に詳しい。その他、四国の俳書について報告したものに、

『今治市河野信一記念文化館図書分類目録』 (昭和四十九年三月 今治市河野信一記念 文化館発行)

『土居町郷土史料第一集 西条藩領伊予国 宇摩郡入野村庄屋山中家文書目録』(土居町 教育委員会 昭和五十七年八月)

『土居町郷土史料第七集 寛保三年伊太祁 神社奉納二百歌仙表合集』(土居町教育委員会 平成三年一月)

『土居町郷土史料第九集享和二年伊太祁宮 奉納俳諧発句輯高三千章』(土居町教育委員 会 平成八年三月)

『愛媛県史』資料編 文学(昭和五十七年三月 愛媛県史編さん委員会)

郷土教育資料10 『重信の俳諧資料』(重信町教育委員会 昭和五十四年二月)

福家惣衛 松尾明徳『香川縣俳諧史』(昭和 二十五年十一月 香川縣文化同好会)

愛媛資料ネット『今治市朝倉・満願寺資料目録』(平成二十年三月)

松山市立子規記念博物館編『第4回特別企画 展 伊予の俳諧』(昭和五十七年十月)

がある。

それらを整理、調査することで研究を推進 する。

4. 研究の成果

当初から予想されていたことだが、四国に 於いては愛媛がもっとも俳書が残存してい ることが判明した。知り得た俳書の状況については、データ化しており、有効な公開方法 を検討している。

また俳書の残存から見える風景として、伊 予における松木淡々の影響の大きさと同時 に、現代の一般社会における淡々の看過ぶり が浮き彫りとなった。

そのために、研究成果を一般に公表し、また研究者通しの情報の交換を狙いとしたシンポジウムを開催した(以下のチラシ参照)。



このシンポジウムは2013年5月19 日に松山市立子規記念博物館で実施し、深沢 了子氏、近藤弘樹氏(四国中央市教育委員会) 福井咲久良氏、塩崎俊彦氏、青木亮人氏、松 井忍氏(NPO法人 GCM 庚申庵倶楽部)を 招いて実施したものである。淡々は京都や大 阪にあって当時の俳壇を一新させたと言わ れるが、伊予においてはその門人が着々と増 えて、その一門の中では無視できな地域とな っていったようである。特に土居の山中家に おいては、秘伝書が伝わり、時風親子にこと に愛されたようである。ゆえに、山中家では 淡々の死後に塚を設け、その傍らに芭蕉塚も 建立し、俳壇の聖地を標榜した。後年に小林 −茶がこの地を訪れることから知られるよ うに、淡々流俳諧は隆盛を極めていたのであ る。にも関わらず、いつしかこの地も衰退し、 山中家の屋敷をかたどった暁雨館の訪問者 も少ない。その現状に警鐘を鳴らすべきシン ポジウムは、当該領域の学問的な深まりを見 せるとともに、一般社会への関心を呼び起こ した点で興味深いものである。

松山の栗田樗堂は、近世中期の芭蕉復興運動に関わり、中央でもよく知られた人物であったが、ご多分に漏れず、時代の波の中で忘却されかた俳人でもあった。樗堂には当時の最先端といってよい煎茶趣味、その具現化と

しての庚申庵という庵があるが、これらも歴 史の闇の中で灰燼に帰すところであった。幸 いに地元の有志と松山市が立ち上がり、NP 〇法人を立ち上げ、その保存と顕彰にと務め ることとなった。とはいえ、その伝記や上方 文人との関わりについては、まだ研究の緒に 就いたにすぎない。まずは、煎茶や上方文人 (特に木村蒹葭堂や長斎)との関わりについ て一から研究する必要があり、その成果を 「栗田樗堂の煎茶 大坂文人との関わりに ついて - 」(『上方文芸研究』第十号)として 発表した。樗堂は松山にありながら、長斎を 通じて、大坂の蒹葭堂の煎茶についての情報 に精通したことが判明し、従来は不明であっ た樗堂の伝記と友に、俳諧と煎茶、上方と松 山との文化交流の実際など多くの新事実を 指摘することができた。その研究において、 近松門左衞門についての新知見も得られた ことも大きな成果であった。

また、ロバート・キャンベル氏、松井忍氏と以下の鼎談を開催した。 これは松山市と松山市教育委員会が主催し、2013年9月1日に松山市立子規記念博物館で実施されたものである。この鼎談の記録は一般にも配布されている。

平賀源内については、著書『平賀源内の研究 大坂篇』(平成26年1月)としてまとめ、その前半生として、讃岐俳壇について語じた。源内には李山という号で、俳諧についてそれなりの情熱を傾けていた時代があった(松浦正一氏「志度俳人と平賀李山山時代、彼の青春期である。この時期のに出た源内からは想像できないこのである。正しい平賀源内研究のためには、今後も四国の俳書の研究が不可欠であると思われる。

また、高浜虚子を中心とした俳人達が愛媛の能楽を守った事実がある。能楽史ではさほど重要視されていないが、四国の俳人というより近世期の俳人と能楽との知られざる別係がうかがえる点で看過されてはならない。折しも、招待ワークショップがフィリピン大学であり、その国際大会(平し、フィリピン大学であり、その問題について発表し、意見を交わした。要約すれば、西洋化にを残した日本の意識を、同じくアジアの島国にあって、伝統芸能を残るフィリピンで議論し、明日に向けて生産的な意見交換を、ということである。

そのいくつかの活字化が以下である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に は下線)

[雑誌論文](計 1 件)

「栗田樗堂の煎茶 大坂文人との関わりに

```
ついて - 」(『上方文芸研究』第十号、PP 4 5
- 5 4、査読有り、2013年6月)
〔学会発表〕(計1件)
<sup>r</sup> The Noh Renaissance in Meiji Period Japan
(1868-1912))
 フィリピン大学国際会議 2014年2月
10⊟
[図書](計 1 件)
『平賀源内の研究 大坂篇』(ペリかん社、
2013年1月)
〔産業財産権〕
 出願状況(計
          件)
名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:
 取得状況(計件)
名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:
〔その他〕
ホームページ等
6. 研究組織
(1)研究代表者
```

福田安典 (FUKUDA YASUNORI

日本女子大学文学部教授 研究者番号:40243141)